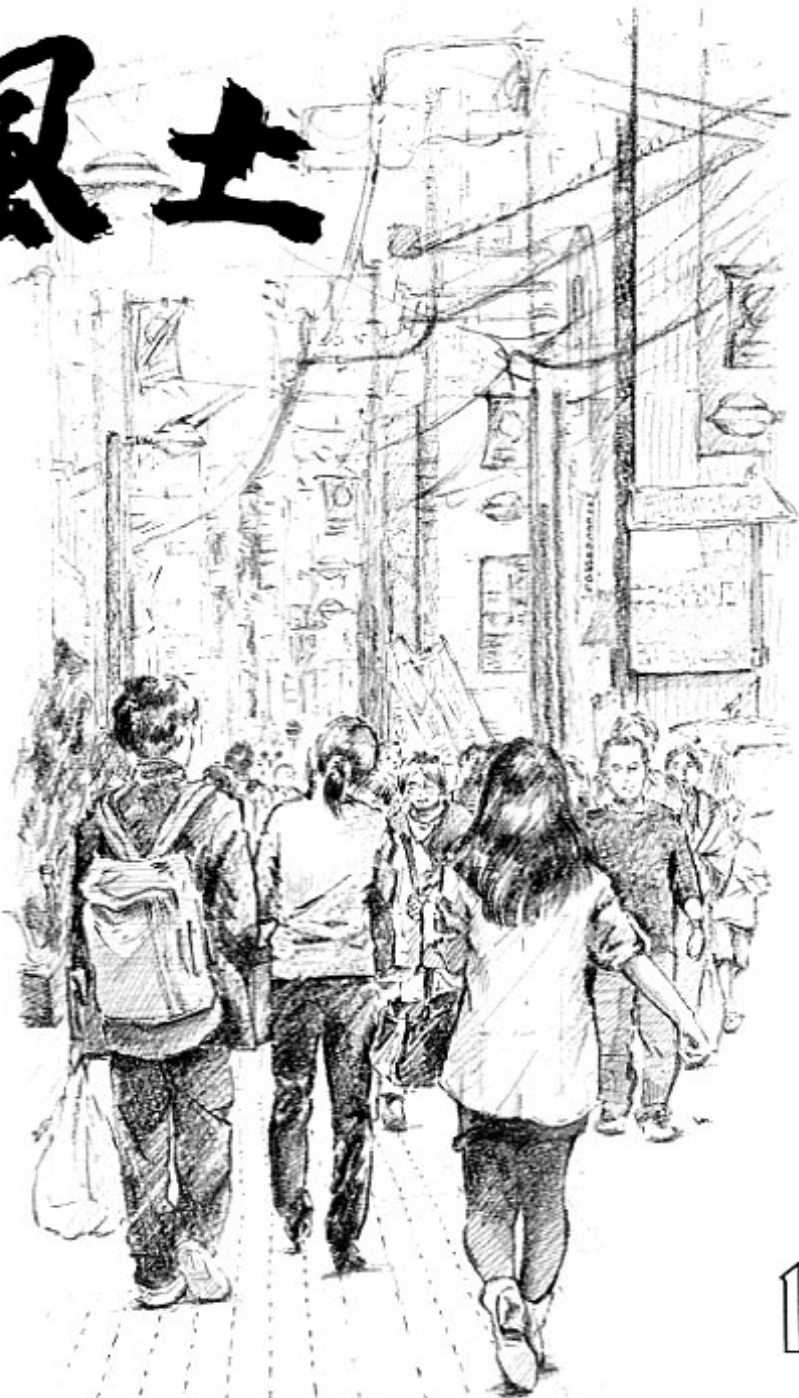


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成23年11月5日発行(毎月5日1回発行)
第51巻11月号(通巻628号)

風土



新松子
神蔵器

曼珠沙華善人まして悪人をや

竹林に日を導きて秋の行く

名月の机に B 4 原稿紙

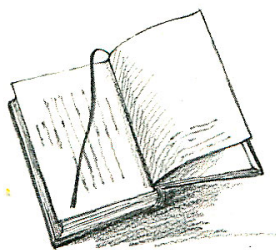
おんおんと鐘楼堂の蟻地獄

子規居士の黙契久し椿の実

子規庵の糸瓜の影を一步出て
瀬祭書屋主人の墓や赤のまま
芋の露実朝の歌ひびきけり
墓に押す墓地の白花曼珠沙華
俳諧道場机に一つ新松子
とろとろと鳴立庵や穴惑ひ
先んじて吉野のさくらもみぢかな

鳴立庵 二句

悼 辺見じゆんさま



竹間集

同人作品



新 涼

鈴木石花

祭屋台組む鳶職の出揃ひぬ
蟬どちの樂終章となる調べ
急かされて月下美人に逢ひに出づ
新涼や演能「石橋」鑑賞会
御詠歌に千灯手伝ふ送り盆
病み抜けし夫初秋の誕生日
蹲踞の縁を平に木賊刈る

おほむらさき

山路紀子

舟べりに水のかぎろひ日の盛
盆道を刈つて彼の世の風通す
盆棚に封切つて置く煙草かな
今年また子の増えてゐる盆の家
碑の摩文仁の丘や海紅豆
仙人掌の氷菓舌先に舐めてみる
飛天女の宙へおほむらさき翔てり

小鳥来る

岩木 茂

滝涼し滝の名句を口ずさみ
せせらぎの奥より滝の音柱
街道に滝音洩れてゐたりけり
蛸や生野の鉦山の岩の肌
七夕の鋪に銀河のありにけり
八月のうたかた流るる五十鈴川
滝音の中に戻つて来る小鳥

一位の実

相沢有理子

やみくもに深山蝶追ひ夕さりぬ
霧晴れぬ這松の辺の岩桔梗
昆布舐め日高郡の夜まつりに
教へ子の墓に祭の面供ふ
曼荼羅凶夏の冷気に身を正す
一位の実食むや昏れそめ麗村
蜻蛉釣る児のがよひてぼんのくぼ

稲の花

小林 輝子

稲の花ほつほつ多つを百日忌
山の雨残んの蓮の紅解く
穴に入るまでは我家の青大将
盆の雨山より来たり山へ去る
いかづちの一発田舎去る人に
盆の雨うからやからの家にあふれ
一握の土大切と薯を掘る

思ひ出団扇

小野寺節子

手にとりし思ひ出団扇に影動く
はぐれ雲横たふ山脈夜の秋
待宵草物音も無き丘に咲く
ひぐらしや「長姫神社」の淋しらに
城址の森にひそめる小さき秋
雁渡し青き竹竿野良着干す
被災地は父母の生国盆の月

うちのかみさん

小林清之介

新聞繰るは我より先よ扇風機
目葉の耳まで垂るる昼寝覚
いらか打つ夕立を聴けぬ年齢となり
書架の秋厚手辞典はもう持てぬ
新聞を切り抜く癖や地震の秋
ピーター・フォーク逝きて三月や遠かなかな
コロンボと「うちのかみさん」小鳥来る

友人の故額田やえ子さんは私の言葉癖を好み、マイ・ワイフを「うちのかみさん」と訳した

踊 笠 抄

— 柴田 久子 —

島へ向く夏の航路の一時
船窓の高見に湧きて雲の峰
白靴の一步に跨ぐ日本海
青田風大佐渡小佐渡へ吹き渡る
麦刈りしあとの山風粗きかな
鴉飛ぶ真夏の海の裏側を
小鼓の紅緒の褪せや夏の宿
かざす手を海へ咲かせて踊の輪
踊笠漢は風を抱くやうに
ビール飲むグラスに透けて日本海

山河集

同人作品



神蔵 器選

世襲なる風折烏帽子秋立てり
鵜かがりの水底魚がす闇の中
鵜舟待つ闇の大きく膨らみぬ
腰蓑の魚のしづくや鵜飼果つ
がうがうとこゑを沈むる鵜籠かな

雨宮 桂子

川風や残暑まぼらの鞍馬口
口論の中に割り込み赤のまま
加茂なすや比叡の麓の畑で買ふ
朝涼や青磁素山の抹茶碗
丈山の坂を這ひ来る秋の風
一葉の坂上りゆく秋暑かな
巨船めく病院照らす盆の月
金輪際色を尽して曼珠沙華

西村 雪園

中沢 三省

文京区音羽の森を夕立過ぐ
死にに來し癌病棟の百日紅
夏帽の潰るるもよし洗ひけり
二階とは夕蝸を聞く高さ
活字大き本持ち込めり緑蔭に
祭来と笠鉾庫の戸を開くる
ペランダに育てて茄子の二本かな

土井 三乙

飲む水の胸にこぼるる秋早
秋口や焼けばほぐるる反古の玉
菊日和老人ホームの草刈られ
杉材の匂ふ普請場秋高し
人住まぬ妻の生家や赤のまま

生田 作

第三十四回桂郎賞入選発表

春立つや天に近づく行基
萬灯会鹿も震へてゐたりけり
鹿の眼に灯の移りゆく余寒かな
だだおしの松明を撒くこゑを撒く
辛夷咲く笑ひ仏の当尾みち
九体寺の極楽浄土春障子
春筍や水分の神軒かさね
駈けのぼる西行庵の山ざくら
隅寺の築地をすべる雀の子
あたたかや胸の高さに善財童子
西の京に少しばかりの種降し
斑鳩の畔とほくなる紫雲英かな
うららかや金魚田空の広さもつ
風光る天理乙女の黒半纏
立夏かな「和を以て貴しと為す」

やまとみち

雨宮 桂子

うひうひし光あつめて袋角
三輪山の滴りやまず酒の神
神ながらみもろの山の茅の輪かな
大神に帳を降ろす蚊喰鳥
雲の峰越ゆ山の辺の万葉歌
捨苗もほとけに変はる堤寺みち
金堂はうす紅いろに蓮ひらく
鑑真の沙羅の一花や御廟前
涼しさや三尊とゐて塔仰ぐ
前足をたたんで座る鹿の子かな
大早の東大寺うら一枚田
てつぺんに来て良弁杉の黒揚羽
沢蟹の秘仏のごとし二月堂
墓鳴いて戒壇堂の暮れのこる
門前に鹿のあふれて夏夕べ



舞鶴漁港の朝（抄）

四方由紀子

高潮に路浸されて実朝顔
糶を待つ漢らの瞳に汗にじむ
八月の梶木かじきの痩せの見えにけり
夏潮や鰯地べたに並べらる
夏枯れ知らぬ日本一の鰯とや
糶の指ひらひら舞鶴の鰯漁獲高日本一といふ白し送南風
糶のあとトロ箱の鰯分け合ふも
入札に思案の刻や鯖高値
大物の鱸に糶子どよめきぬ
生簀より外し鮑の糶られゆく

風土独語／神蔵器



夕立去り山河姿勢を正しけり

上辻 蒼人

一天にわかにかき曇り、風波を立て、時には雷鳴をともなつて夕立は車軸を流すような豪雨になる。激しい時は人々は家の中にもこもり、動物や小鳥たちも岩陰や木陰に身を寄せている。しかし夕立の激しさも通常は約一時間ぐらいでからりと晴れ上がる。

京都は盆地である。比叡山や鞍馬山など比較的高い山から、東山三十六峰の峰々や嵐山・高雄などにとり巻かれている。盆地の寒暖の差は大きく祇園祭の山鉾巡行の七月十七日の暑さなどは語りぐさになっている。京の夕立は激しい。しかし、時間としては短いのではないか。激しければ激しいほど心を打たれ、励まされ、清められる。そして一たび夕立が去ると、新たな力が充ち希望が生まれ、毅然と自らの姿勢を正している。

作者はこのたび『道程』につづく第二句集『青田』を上木された。掲出句はいかにも蒼人さんらしく謙虚にして、老来いよいよ健勝、第三句集への決意を表明されたようである。

己がため挽く珈琲や夜の秋

山本 浪子

いい作品というのは、「ひと口に言ってしまうば、ありそうで

無かった句だ」と龍太さんは言われた。全くそのとおりであるが、これは選者にも言えることで、平凡に見える作品の中にもきらりと輝く非凡な鋭い光があることを見落してしまうことをおそれる。

掲出句は特に解説も説明も必要としない、ごく平明なものであるが、「己がため挽く珈琲」と「夜の秋」の季語は微妙である。

作者のうちにあるものは、人間の根底にある秋そのものに対する感覚感情、広い意味で郷愁のようなものではなかるうか。まだまだ夏の暑さが残っているが、夜になれば空気も澄んでさわやか、快い夜は自然ともものあわれを感じ、ハワイ・コナなど、自分の好きなコーヒーを淹れて楽しみたくなる。

この点から言えばこの句は秋に入る。しかし、こうした感情は昼間の暑さがあつてこそのもので、虚子の主張のとおり「夜の秋」の季語は夏の季に入る。日常の題材でさらりと仕上げ、読者にもよいコーヒーの香りを楽しませてくれる。流石である。

八月や魁夷の道の立ち上がる

工藤はるみ

はじめに「東山魁夷」の抜粋より引用させていただく。

昭和二十五年第六回日展に「道」という作品を出品した。これは青森県八戸の種差海岸にある牧場での取材である―中略―夏の朝早い空気の中に、静かに息づくような画面にしたいと思った。この作品の象徴する世界は、私にとつて遍歴の果てでもあり、また、新しく始まる道でもあつた。それは、絶望と希望を織り交ぜ

てはるかに続く一筋の道であった。

なお、「道」を魁夷が種差の牧場を訪れて取材したのは、日展へ出品した年より十数年前という。そして日展へ出品した作品は戦後あらためて訪れた夏の早朝風景ということである。

種差海岸の牧場であるから灯台もあり、放牧の馬の群れなども見える風景であったようだが、一切の説明的なものを省いてただ一本の道だけの構図で仕上げた。魁夷のたましいの叫びである。句の季語、八月は動かない。

(以下略)



風土集



神蔵 器選

明易やあかときの月まだ赤し 五條 上辻 蒼人

向日葵の日影の背のみどり濃し

空蟬の時を止めたる葉末かな

夕立去り山河姿勢を正しけり

迎火焚く門田の早稲穂匂ふなか

八朔の水に折り目の生まれけり

一刻を水音とあり夏座敷

鳳仙花弾け一步の距離ひろく

蒼味帯ぶ三日月堀に金魚かな

二度廻る熱中症の注意書

一山の風吹上ぐる心太

一步より踊りの裾を翻す

盃にかなかなの満ち溢れたり

一粒の星の色より鉦叩

朝涼し人通りなき河童橋

藤枝

間島あきら

根岸 善行

己がため挽く珈琲や夜の秋 川崎 山本 浪子

風向の変はりたるらし大文字

大文字果つや高まる水の音

三人の一人見逃す流れ星

象嵌の衣装箆箆や屏風祭

流星や海に真珠の育ちをり

バイク来て礼儀正しき盆の僧

八月や魁夷の道の立ち上がる

蝸やかなの掠れの墨にじむ

秋冷や積み上げし皿影白し

炎昼のブルーベリーを煮詰めをり

霧を追ひ霧の流るる溶岩が原

さはやかやロビーに智恵子貼絵展

就中夜明けまぢかの虫のこゑ

鱚雲水の中ゆく水のいろ

大分

工藤はるみ

東京

林いづみ